

# 歴史の文差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



歴史上の偉人といえども、人  
間である以上、発想に無理があ  
る場合が少なくない。実際に政  
策にしたら、実行不可能なばか  
りか、日本の国民が塗炭の苦し  
みに陥ることを全く考えない人

物も多かった。幕末、尊王攘夷  
運動の先駆者、水戸の徳川齊昭  
(烈公)や藤田東湖もそうであ  
る。2人に共通するのは、ペリ  
ー提督に象徴される悪なる墨夷  
(アメリカ人)はじめ、夷狄を

争で必勝の信念がなく「陋夷の  
小醜に従ふ」(劣った夷狄のこ  
う。「何ぞ必ずしも兵を以て是  
を撃つに至らん」と松陰の血  
氣をたしなめる。  
集「第3巻」)。

## 素直に社会を見る大切さ

同じ長州藩の元明倫館学頭・  
山県太華は、アメリカやロシア  
で江戸を攻撃すれば、騒動は大

も「主命を奉じて我が邦に來  
る」であり、彼らは利害を説  
いて貿易などを希望し、「大  
国」として対等の礼で來航した  
と冷静に語り、激しく憤る松陰  
をいさめた。さらに、彼らは、  
言葉で「少しき不遜の形」はあ

という太華の主張には無理がな  
い。彼らは「来りて寇するに非  
ず」と、侵略でなく使節を派遣  
してきたのだと、その平和的性  
格を強調するのである。  
また、使いが来れば使者を遇  
する礼があり、来寇なら力を尽  
して防ぐべきだ、と太華は説い  
た。

「陋夷の小醜に従ふ」につい  
ても、かつて中国で海外の国を  
「蛮夷」と蔑んだのはもはや根  
拠もなく「皆人の国」であるの  
におかしいと批判した。つま  
り、アメリカなど海外の国は代  
々日本に悪いことをしておら  
ず、何故に憎む必要があるのだ  
ろうかと素直に世の中を見るの